

Letters

Arpak

レターズアルパック

VOL.239

ISSN 2432-5295

空

CONTENTS

- ◆【空】…01～04
- ◆今、こんな仕事をしています…05～07
- ◆新人紹介…07～08
- ◆近況&イベントのお知らせ…09～10
- ◆受賞しました…裏表紙

空

本号のテーマは「空」(クウ、そら、から、あーける、むなーしい...)。仏教の深い教えもありますが、普段から身近に使う言葉です。

ところで、空と宇宙の境目はどこかという素朴な疑問をもったことはないでしょうか? 青空を高く昇っていくといずれ真つ暗な宇宙に出ます。どこからが空でどこからが宇宙なのか。JAXAのウェブサイト解説がありました。

一般的には大気がほとんどなくなるところが空と宇宙の境目で、国際航空連盟では高度100キロメートルから上を、米国空軍は80キロメートルから上を宇宙と定義しているそうです。

つまり宇宙までは100キロメートル。水平距離で考えると京都と名古屋の間の直線距離が約100キロメートルです。宇宙って意外に近いですね。

※アルパックにはJAXAを諦めて入社した人もいます。

レターズアルパック編集委員会

スカイブルー

三輪泰司：
名誉会長

霜田稔画・アトリエ・アルパック



吉田山麓の露地長屋アルパック創業 1987年2月節分の日 縦横の回転窓とグリーンのマット、白のヘシアンクロスに木造のマスタープラン台、Think Global & Act Local



1968年頃のARPAK 吉田山麓長屋改造アトリエ風景復元想定 三輪、三輪夫人、糸乗、浅田、倉本、桑島、霜田など

アルパックのシンボル・カラーは、「スカイブルー」社長
の「幡印」ハタジルシ」は「スカイブルー」本社エントランス
では、スカイブルーのスクリーン
がお出迎え。

何故、スカイブルーなのか?
明るい、おおらかじゃないですか?
か? 何時、誰が、決めたの?

「アルパック創業」を決定した
1966年9月17日。創立者・
西山卯三研究室代表と創業者
三人の
「進々堂
会議」。

吉田山
麓・ア
トリエ・
アルパッ
ク。カー

アルパック
(株)地域計画建築研究所

本社エントランス

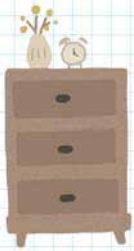


マイカー：スカイブルー



物から社員のマイカーまで、スカイブルー。スカイブルー。

ペットは、スカイブルー。
(上画) 明るく、おおらかで、ほがらかなヒトがいるトコロには、ヒトが集まる。ハナシがはずむ。シゴトが増える。
以来、出版



「空っぽ」の時間

絹原一寛：
都市再生・マネジメントグループ

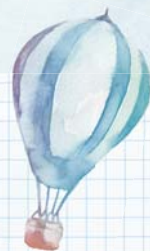
皆さんは、仕事の合間などに「空っぽ」になる時間を作るルーチンをお持ちでしょうか。私にとって、趣味の楽器（トランペット）の練習時間は、頭が「空っぽ」になるひとときです。レッスンに定期的に通っており、先生のお手本を真似しながら、黙々と教本などの練習メニューをこなします。練習内容は音階など、ごく基本的な動作ばかりを1時間強。その間はひたすら楽器と、音楽と向き合う時間で、無心になります。終わった後は心地よい疲れがあり、それこそ文字通り「空っぽ」になってしまふのですが、頭の中の感性、情報をいつも使っているも



のと違うものに定期的に入れ替えていく感覚は、実は仕事にも生きるのではないかと思つて、コツコツと続けています。

あとは、「空」を眺める時も取るようにしています。ちよつと作業がひと段落した時、思考が詰まって上手く進まなくなつた時など、ちよつとだけ外へ出て、一息ついて切り替えるように。好きな女優の芦田愛菜さんが動画で「毎日、空を見上げる」という話をされていて、勝手に共感をしています。

もうひとつだけ。お風呂で水と湯の交互浴をして、心も体も「空っぽ」状態を作るのもお気に入りのルーチンです。たまに週末には近くの銭湯に行つて、交互浴をすると、よく眠れます。扱う仕事や情報の量も格段に増えてきた世の中なので、上手く「空っぽ」にする術を身に付けたいですね。そうすると、風通しも良くなって、新しいものも入りやすくなる。のかな？と思つています。アルパックメンバーや読者の皆さんの「空っぽ」術も、いろいろと聞いてみたいと思います。



かさいの空

浅田麻記子：
地域再生デザイングループ



終戦記念日の「かさいの空」と「紫電改」

この写真は令和3年の終戦記念日に当社建築プランニング・デザイングループの三浦が撮影したものであり、2年前に兵庫県加西市の鶴野地域での道の駅整備に関する業務を獲得した企画書の表紙を飾った写真です。昨年度はプロポーザルに挑戦するも非選定、他社が業務を行っています。ひよんなことから大阪観光大学の小野田先生のお手伝いで、再び鶴野地域に関わることになりました。

加西市には第二次世界大戦時、戦局が悪化しはじめた頃、パイロットを養成するために設置された旧日本海軍の練習航空隊の飛行場跡があり、現在も日本で唯一滑走路跡が残されています。行場で最終組み立てされ、試験飛行がなされました。また、神風特攻隊「白鷺隊」が鶴野飛行場から大分県宇佐へ、さらに出撃基地のあった鹿児島県串良へ飛び立ち、沖繩の作戦に参加しました。

姫路市で製造された戦闘機「紫電」や「紫電改」が鶴野飛行場で最終組み立てされ、試験飛行がなされました。また、神風特攻隊「白鷺隊」が鶴野飛行場から大分県宇佐へ、さらに出撃基地のあった鹿児島県串良へ飛び立ち、沖繩の作戦に参加しました。このような歴史を後世に伝えるため、加西市では紫電改の実物大模型の展示などを行う「Soraかさい」が令和4年度にオープンし、周辺に残る戦争遺産とともに「鶴野フィールドミュージアム」として活用しています。今回の業務では、この滑走路跡を活かしたRVパークの整備に関するものですが、旅行会社出身の小野田先生、設計事務所、照明デザイン会社とともに照明で滑走路跡が浮かび上がる空間デザインを提案することになりました。普段は何もないコンクリート舗装の滑走路ですが、泊まることで夜になると滑走路が浮かび上がり、当時のかさいの空に思いをはせることができます。泊まることでしか味わえない体験ができる他にはないRVパークとして、今後整備が予定されていますので、完成した際にはキャンピングカーをレンタルの上、宿泊していただくと幸いです。

空き家と税についての学び

竹内和巳：
生活デザイングループ

平成26年にいわゆる空き家特措法が成立してから今年で10年が経ちます。

多くの自治体で空家等の対策計画が策定され、様々な支援施策が行われるようになりました。最近では、ニュースで空き家や相続の話題を見ることも増えてきました。

一方で、空き家総数は増え続けており、国は更なる対策の推進に向けて、今年3月に法改正案が閣議決定されたところです。その中には、固定資産税の住宅用地特例解除の対象を拡大する内容も盛り込まれています。啓発してもみんな言うこと聞かへんかったから罰則増やします、ということです。

さて、ここからが本題です。解体すると税金が上がるからそのままにしておく、というのは、空き家が放置される理由としてよく挙がる内容です。

ふと気になったので、住宅用地の固定資産税はなぜ特例的に減免されるのか、検索してみると、住宅政策上の見地からその税負担を特に軽減するために昭和48年より導入が始まっています。住宅用地は事業用地と異

なり、収益が発生しない存在である中で、当時の地価高騰に対して、所有者の支払能力が考慮された、ということのようです。調べる中では、固定資産税の歴史を見ると、ほかにも様々な変更が行われてきた経過もわかってきました。

人が減るこの時代、エリアによっては、更地であることを評価する未来があってもいいのかな、という妄想をもって、結びとします。最近、個人投資家がボロ家を購入して賃貸している戸建に引越しました。夏が来る前に天井断熱にも着手予定です。



新居の天井裏の様子

スカイスクレイパーには オープンスペースがよく似合う

杉本健太朗：

建築プランニング・デザイングループ

バベルの塔、人々は天にも届く高い塔を建てようとして神の怒りを買って崩されてしまった物語ですが、現代では、鉄とガラスとコンクリートを用いて、世界中の都市で超高層ビルが建ち並んでいます。超高層ビルは英語でスカイスクレイパー (Skyscraper)、直訳すると「空をこするもの」の意味だそうです。商業主義的な見方をすれば、床を増やそうとして天にも届きそうなくらい高く積み上げている、現代人は何とも強欲であると捉えられてしまうかもしれません。



淀川の河川敷越しに見える梅田スカイビルと高層ビル群

私は元々、自然や生き物が好きですが、一方で、大都市に超高層ビルが建ち並ぶ風景も好きです。都市を捉えるイメージとして、特徴的であつたり、美しかったり、他を圧倒するような存在感であつたりと、ランドマークとなるような超高層ビルに魅力を感じており、眺めているだけで興味深いものです。

大阪に住んで5年が経ちましたが、名古屋から来た私にとっては、大阪はとても大きなまちです。本稿の執筆をきっかけに、個人的にいいなと思う超高層ビルを目掛けて、改めてまちをうろろ (まちを観察) してみました。

まず向かったのは、空中庭園とそこに至る空中のエスカレーターが特徴的な梅田スカイビル。京都駅ビルとも共通するようなポストモダンので、フランスのパリのグランダルシュ (通称・新凱旋門) のような巨大な門型のフレームは、新たなランドマークをつくりたかつたんだという強い意思を感じさせます。個人的にいいなと思う眺めは、離れた位置からの遠景です。北側の淀川の河川敷越しからは、遠くに梅田のまちな高層ビル群が建ち並ぶ中に、周りのビルと比べて強烈な存在感を放っている梅田スカイビルの門型のシルエットが浮かぶ光景を見ることができま



芝生広場の奥に見える圧倒的な高さのあへのハルカス

どれだけ高いのか、いまいち感覚的に分かりにくいため、天王寺公園エントランスエリア (てんしば) に移動しました。イベントが行われていて賑やかな芝生広場越しに見るあへのハルカスは、(周りに高層ビルが少ないこともありますが) なお一層高さが際立っています。まさに圧倒的なランドマークです。

最後に、東西のツインタワーがランドマークとなっている中之島フェスティバルタワー。超高層ビルの高さに加えて、それが2棟並んだ間の道路を進んでいくと、まるでファンタジー映画に出てくる神話の世界の巨大な門柱のようにも見えます。ビルの足元を通り抜けた後は、堂島川・土佐堀川沿いを歩いて行くと、ビル



中之島フェスティバルタワーと川面と空の青

伏見稲荷界隈のまちづくりをお手伝いしました

山口泰生：

地域産業イノベーショングループ



まち歩きの様子



講演会の様子

京都市では、自立・自走型のまちづくりを展開し、長期的な視点で地域課題の解決に寄与する市民・事業者や、将来的に建築計画を誘導することを目指して毎年支援事業を実施しています。

その一環として、伏見稲荷周辺のエリアマネジメント組織である「伏見稲荷周辺の住みよいまちづくり推進協議会（以下、「協議会」）」の活動を支援する機会を得ました。

地域関係者の皆さんのヒアリングを通じて、令和3年3月に設立された協議会の活動がコロナ禍で長らく中断していること、アフターコロナで観光客増加に伴い、交通問題やゴミ問題などの問題が再燃してきたことがわかりました。そこで協議会活動の再始動を目的として、手始めに「まち歩き」「講演会」を開催しました。協議会自体の

PRや担い手の発掘に繋がることが期待しました。

まち歩きでは、京都観光文化を考える会・都草の森幸弘氏をお招きして、伏見稲荷大社界隈の散策を行いました。大社のご厚意により、非公開の重要文化財「松の下屋・お茶屋」「史蹟（荷田春満旧宅）」なども見学させていただくことができました。

講演会では、関西国際大学教授・京都府立大学名誉教授の宗田好史氏をお招きして、「暮らしと観光が共存するまちづくりを目指して」というテーマで、統計データ等を用いながら、数十年來の京都の観光地の変化や、これからの観光が進むべき道筋をご教授いただきました。

今回の企画を契機として、「まちづくりには正解がない」ということを改めて認識するとともに、正解がない中でも試行錯誤

を繰り返すことの大切さを感じました。今後も、伏見稲荷界隈のまちづくりが観光と上手共存できるようなご支援できたらと思います。

びわ湖とともにある歴史的景観を守る

水谷省三

ソーシャル・イノベーションデザイングループ

大津市景観計画が策定されてから15年が経過し、改定する時期を迎えています。この第2次大津市景観計画（素案）作成を支援しました。

改定に際して景観重点地区の指定が検討されています。この景観重点地区は、「堅田地区」「坂本地区」「大津百町地区」の3つの地区があります。令和2年に策定された「大津市歴史的風致維持向上計画」においても、重点区域として、3地域の指定が行われています。

「堅田地区」は、びわ湖と堅田内湖を結ぶ堀割り、伊豆神社や浮御堂などの神社や伝統的なまちなみが特徴的な地区です。これまでに景観協定の締結や修景事業など、地域住民による景観まちづくりが行われてきました。

「坂本地区」は、日吉大社の境内地や里坊を中心とした社寺群があり、穴太衆積みの石積みや伝統的な町家などが連なる歴史的なまちなみが特徴的です。

「大津百町地区」は、JR大津駅北側の中心市街地にあり、旧東海道が通る歴史的な市街地が形成されています。地区内の主要道路沿道においては、町家など

歴史的な建物が点在し、大津祭りの曳山巡行の舞台となるなど、旧東海道周辺の歴史的なまちなみが継承されています。

これらの地区のうち、堅田地区はびわ湖に面していますが、坂本地区と大津百町地区は、びわ湖岸からすこし離れた場所に位置しています。この2地区では、市街地に丘陵が迫っていることもあり、湖岸から山裾に向かって急速に標高が上がっています。このような地区の幹線道路では、道路の正面にびわ湖面を眺望できる特徴的な視点場があります。歴史的なまちの中から、びわ湖への象徴的な眺めが今も守られています。



堅田地区のまちなみ



坂本地区のまちなみ



中央通りの正面に見える象徴的なびわ湖面への眺望（大津百町地区）



県道比叡山線の正面に見える象徴的なびわ湖面への眺望（坂本地区）

おおさか CO₂CO₂ (コツコツ) ポイント+の ロゴマークを公募しています

長沢弘樹：

サステナビリティマネジメントグループ



大阪府は、2050年に府域のCO₂排出量実質ゼロを実現するため、まずは2030年に4割削減する目標を立てています。

ここで、大阪府内から排出されるCO₂の約3割弱が家庭からであることを踏まえると、実質ゼロを目指すためには家庭でのCO₂排出の削減が欠かせません。

そこで大阪府は、府民の脱炭素への意識改革・行動喚起を図ることを目的に、昨年度から府内での脱炭素型の消費行動に対して事業者が付与する通常ポイントに乗せる「脱炭素ポイント制度」を実施しています。

(昨年度の237号でも紹介)

アルパックは当制度の事務局業務等を受託しています。昨年度は食品スーパーなど6社の参画でしたが、今年度はさらに参画事業者を拡大して実施する予定です。また、将来的には、制度を自立させ、大阪府の支援なしに「脱炭素ポイント」が普及



昨年の様子



大阪府のロゴ募集案内のページ

することを目指しています。

今年度は、制度の正式な名称が「おおさかCO₂(コツコツ)ポイント+」と決まったこともあり、制度を広く普及させることを目指してロゴマークを公募することとしました。募集期間は6月9日から7月24日まで、最優秀賞には賞金20万円としており、幅広い応募をお待ちしています。

ロゴは、今後、本事業で使用するほか、参画事業者の実施する脱炭素の取組などにおいても広くご利用いただくことを想定しています。募集の概要は下記のとおりです。詳細は左記HPに掲載の募集要綱等をご覧ください。

「次なる茨木まちづくりアイデア検討会議」開催報告 ～大学生と地域組織の連携による新たな地域活動への展開～

水野巧基：

公共マネジメントグループ

茨木市では、地域組織の持続可能な運営に向けて、令和元年度から小学校区別でワークショップを開催し、地域課題の洗い出し・共有からその解決方策の検討を進めています。

令和3～4年度には、地域課題解決に取り組む地域組織の活動事例集「住みたい・住み続けたいまちづくり大百科」を作成し、市内の地域組織への情報発信を行うとともに、作成にあたって大学生が地域組織へ取材を行いました。

その中で、地域から「取材以外でも学生とつながる機会がほしい」、学生から「取材で地域活動を学んだので、一緒に地域活動をした」といった声を頂きました。令和4年度には、取材を通して地域と学生が「知って・学んで・つながる」ことから一歩進み、地域活動について「一緒に考え、取り組む」機会を創出するため、中津小学校区と大学生が参加して「次なる茨木まちづくりアイデア検討会議」を開催しました。

中津小学校区では、令和3年度に開催したワークショップで、地域活動にこれまで参加していない人たちが若い世代の人たちも参加したくなるワークショップを開催したいと話をしており、そのアイデアを学生に期待して一緒に企画を検討することになりました。

具体的には、地域と学生がま

ちあるきを行い企画検討に向けた意見交換会を開催する会議を1回、その後地域のニーズに添えるアイデアを深めるための学生ミーティングを行い、学生からのアイデアを地域と一緒にブラッシュアップするワークショップを経て、ウォークラリーを開催しました。学生が考えたチラシの効果もあつてか当日は小学生から高齢者まで幅広い年代の約100名が参加しました。学生が考えた参加者が楽しめる仕掛け(クイズラリー、参加者の距離を縮めるニッケネームの設定、ボーナスくじ、チェキで撮影した記念写真プレゼント等)によって、多くの笑顔が溢れたイベントになりました。

参加者や地域組織、学生からは「毎年参加したい」といった声があり、この活動を知った他の小学校区の地域組織からも「次は自分たちの地域で学生と一緒にアイデア検討会議をやりたい」と反応がありました。その結果、今回モデル的に実施した地域と大学生の新たな連携事業は、令和5年度も他の地域に展開していく予定となっています。今後、各小学校区で新たな魅力創出や地域課題解決に向けた取組になつていくのではないかと期待しています。



まちづくり検討会議の紹介ページ

「東高瀬川ビジネスパーク構想」を策定しました！

高野隆嗣：
地域産業イノベーショングループ

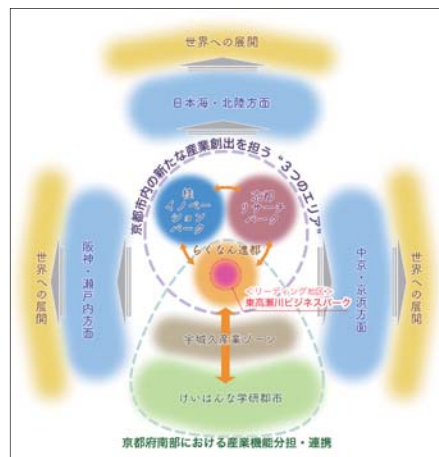


パース：将来イメージスケッチ
(AI画像生成サービス「Midjourney」
による製作。©crossDesign,Inc)

今年3月、京都の新たな産業活力を生み出す「らくなん進都のコアの創出」を目指して、「東高瀬川ビジネスパーク構想」（以下「構想」）を策定しました。

半導体装置の京都発ベンチャーとして世界的に知られるサムコ株式会社
の創業者、辻理会長の呼びかけによるもので、この地に縁のある企業経営者有志が集まり、約一年間の研究を重ねて取り纏めたものです。

京都市南部の「らくなん進都」（約607ヘクタール）では、京都市や京都商工会議所等が中心となり、長年、まちづくりと企業集積を進めてきました。今回の構想では、「らくなん進都」の中央に位置し、東は東高瀬川、西は油小路、北は城南宮道、南は大手筋に囲まれた約43ヘクタールの区域を「東高瀬川エリア」と名付けています。今後は、スタートアップの第二ステージの適地として整備すると共に、



図：地帯構想図

半導体・エレクトロニクス、医療・バイオ、環境関連等の企業集積を掲げています。また、域内企業や京都市成長産業創造センター等によるコミュニティを形成し、地域ブランドの確立を目指すものです。

こうした取組を通じて、立地するベンチャー・中堅企業が高収益企業に成長し、京都市の税収増に貢献するとともに、各社で働く従業員らに、より良い暮らしと生き甲斐を提供できる街を目指すものです。

この区域は「京都ファッション産業団地」に近接し、当社とご縁の深い場所です（既報232号）。先達が半世紀に渡り「種まき」してこられた街で、私たちがお役立ちできるような汗をかきたいと思えます。応援のほど宜しく願います。

※構想の策定事務局は当社が担っています。ご関心のある方はお気軽にお問い合わせ下さい。

新人紹介

緑の下の力持ち



宇都宮和文
総務部

大 阪生まれの44歳です。親の仕事の関係で小学校時代は大阪府泉南市、鳥取県米子市、兵庫県神戸市の3つの小学校を経験しました。

大学は関西大学総合情報学部を卒業しました。あまり熱心に勉強しなかったこともあり、見事に就職失敗！食べるためと怖いもの見たさで航空自衛隊に入隊しました。自衛隊では調達という職種につき、航空機部品や修理等の役務を調達するため入札業務や予定価格調書など作成しておりました。その他射撃や行軍、格闘、災害派遣等も経験しました。自衛隊は思いのほか居心地がよく、気が付けば15年。退官（54歳）が近づくとつれて、新しいことに挑戦するなら今しかないと考え38歳で退官しました。退官後は総務部員として他社で経験を積み、この度アルパックに入社しました。

これまでの経験を活かし緑の下の力持ちとして頼れる存在を目指して頑張ります。皆様どうぞよろしくお願ひ致します。

総

務部でサポートスタッフとして4年半勤務しまして、4月から正社員となりました。

大阪府の枚方市で育ち、子どもの頃は毎年、枚方パークの菊人形に通っていました。菊人形とは1912年に始まった、菊の苗を細工して人形に飾り付けた、日本の伝統芸術です。残念ながら11年前に後継者不足のため幕を閉じてしまいました。後継者がいないと菊の濃厚な香りが広がり、華やかでありながら少し怖いような独特な世界だったことを今でもよく覚えています。大人になって思い返してみると、あの素晴らしい空間を作り出しているのは裏方の菊師さん達で、とても繊細で時間のかかる作業をされていたんだなあと、表には見えないお仕事の大切さを考えさせられます。私も緑の下の力持ちの総務部の一員として、これからもがんばっていききたいと思えます。どうぞよろしくお願ひいたします。

菊人形



岩城優香
総務部

新人紹介

誠心誠意



芳田知紀
都市再生・マネジメントグループ

京 都で生まれ、小さい頃から京都らしい風情ある景観に日常的に触れながら育ちました。私の父は着物を染める染色業の職人です。父のクラフトマンシップに影響されたのか、なにかを創造することに興味を持ち、大学では建築デザイン、大学院では都市空間デザインを専攻しました。研究で、地域の方々のまちづくりへの情熱を目の当たりにし、地域に入り込む楽しさを知った大学生活でした。そして、「まちの思いを専門的に実践する技術」の必要性を感じ、アルパックに入りました。社会貢献メインのまちづくりだけでなく、持続的な稼げるまちづくりをコーディネートできるようなりたいです。目標実現へのステップは不明瞭ですが、実務を通して解像度を上げていきます。まだまだ社会人として未熟ですが、皆様のお力になれるように、そして、自分の目指すべき人間像になる為に、誠心誠意、業務に取り組みます。よろしく願いいたします。

初

めまして。私の名前はちょうゆうりんと読みます。父は在日中国（中華民国）人3世、母は旧姓佐藤の東京人、そんな二人から生まれた「大阪生まれ天満育ち」の混血児です。私は大阪中華学校という華僑の子供たちのための学校で9年間過ごしました。保育園の頃はポケモンマスターになるのが夢で、毎日初代ゲームボーイで遊ぶのが楽しみで仕方ない当時の一般的な児童だったのに、突然中国語とカタコトの日本語が飛び交う異空間に入学することになって、大変でした。

そんな貴重な経験の後、京橋にある大阪市立東高校の英語科に進学。そこから二浪して京都大学理学部に入りました。構内の吉田寮という自治寮に住み、その空間とそこにも住む学友たちから多くのものを得られました。私がアルパックに入社するきっかけとなった「ごみ調査」のアルバイトも寮で知りました。廃棄物組成調査はアルパックOBの小泉春洋さんが1980年に始められた事業で、現場での調査もこの字数では書ききれないくらい面白くて楽しいものです。この欄を読んでくださっているあなたもやってみませんか。

『ごみを触って分ける仕事』…も、やります



張玉鈴
サスティナビリティマネジメントグループ

私 仕事を好きなことに



石橋昂大
建築プランニング・デザイングループ

私

は福岡県久留米市出身で、進学を機に7年間名古屋で過ごしました。大学・大学院とラグビー部の活動に明け暮れる傍ら、学業では、一貫して「キャンパス計画と都市」というテーマで研究を続けました。振り返ると、この研究活動の影響もあって、さまざまな要素が複雑に絡み合う都市の面白さに惹かれ、「まちづくり」という分野に関心を持ったのだと思います。

そんな私は好きなことにとことん夢中になる性格です。特に映画鑑賞には小学生の頃からハマっていて、今では年に100本以上の映画を鑑賞しています。映画は普段体験することのできない刺激を与えてくれるので、ワクワクします。

私自身も「まちづくり」を通して、そこに住む人たちにたくさんの刺激を与えられるよう成長していきたいと思っています。そして、仕事を好きになって、とことん夢中になっていきたいです。皆様どうぞよろしく願いいたします。

私

は大阪生まれ大阪育ちで、幼少期から大学までずっと大阪市内で過ごしてきました。入社後、周囲から「シティーガールだね」とよく言われるようになり、自分が都会っ子であることをようやく意識し始めました。

アルパックとの出会いは、学部3回生でのインターンシップでした。初日から地元の方々との会議に参加させていただき、地域に入って仕事をすることに興味を持ちました。その後、修士1年の夏頃から約1年半アルバイトでお世話になり、入社に至った次第です。

大学では都市計画研究室に所属し、人々がまちなかの空間をどのように使っているか、人々が過ごしやすい空間の設えやデザインについて、研究やプロジェクトを通して学んできました。

これからは、大阪だけではなくほかの地域にも積極的に足を運び、関われるような仕事をしていきたいと考えています。皆様、これからどうぞよろしく願いいたします。

地域に飛び出して



吉岡志穂
都市再生・マネジメントグループ

2023年3月末、アルパックを卒業させていただき、遠藤真森です。主に農業・農村分野の活性化の取組や計画策定の支援を5年間担当しました。

タイトルの通り、現在、私は兵庫県豊岡市に住んでいます。豊岡市は父の故郷であり、阪神地域で育った私にとっては、盆や正月など年に数回帰省する第2の故郷のような場所でした。子どものころから生物多様性や森林の保全に関心があり、豊岡市のコウノトリ野生復帰の取組を当時から良く思っていた記憶があります。高校時代、森林と人間社会との境であり、生物多様性の保全にも関係が深い、農村や農業の課題解決も重要だと考え、大学は農学部に進学。農村社会や地域資源の活用等について学びを深めました。また、演劇サークルに所属し、芸術文化がもたらす人や社会への影響に可能性を感じたり…。

入社後の2年間、偶然、豊岡市農業ビジョンの策定支援に携わります。2年目の2019年度、豊岡の父の実家が空き家に。また、豊岡演劇祭が始まるなど、演劇のまちづくりが本格化。そしてコロナ禍に。豊岡への関心が日に日に高まってきました。

2020年3月、豊岡市農業ビジョン策定。コンサルタントとして行政の計画策定を支援した後、その計画の推進まで携われるとは限りません。ビジョン実現に向けても貢献したい。豊岡で持続可能な農業・農村の

モデルづくりをしたい。そんな思いが強くなり、国の制度も活用しながら、2021年4月に豊岡市役所に出向。移住し、週3日豊岡市職員、2日アルパックというワークスタイルで、ビジョン推進に2年間携わりました。

そして現在、アルパックを卒業し、豊岡市の集落支援員として引き続きビジョン推進に携わりながら、農業・農村の活性化支援を行っています。

入社してそれほど長くない私のわがままを聞き入れ、豊岡に送り出していただいたアルパック、所員の皆様には感謝しかありません。そして業務で携わった全ての地域・行政の方々、お世話になりありがとうございました。卒業という形にはなりましたが、持続可能なまちづくりに貢献していく志に変わりはなく、今後の私の事業や豊岡での活動を通じて得た知見のシェアなど、ご期待いただければ幸いです。引き続きよろしくお願いたします。



休耕田を活用したピオトープ

ノラカブル研究会

筈谷友紀子：

ソーシャル・イノベティブデザイングループ

近年の都市政策は、商業施設に負けず劣らずの『心地よい』空間を生み出していますが、どれも似たり寄ったりの定型化された空間になってはいないでしょうか。

本研究会では、心地よく整えられた道路空間、いわゆるウォーカブル事業を対象に「それってほんまに心地ええの？」と問いかけを行いました。そこで生まれたワードが、『ノラカブル』=『野良のウォーカブル空間』です。意図的に作られたのではなく、自然発生的な魅力ある通り空間から「心地よい通り空間」の要素を抽出しようと試みたわけです。そこで挙げられたノラカブル空間は、写真のような「素朴なだけどこかワクワクして視線が動く小道」でした。

ここで個人的な昔話を挟みます。私の実家は郊外のミニ開発ですが、隣に集落がありました。集落へ行くには小さな川を渡って鍵型の路地を通り抜ける必要があります。その路地では様々な体験ができるのです。路地から見える庭木の花や実の様相、塀に座る猫たち、小さな橋から覗く川の模様、ごつごつした石畳の踏み心地。ただ歩くだけではない、様々な体験、過ごし方ができる道でした。誰が作ったというわけではないけ

れども、なんかいい。研究会ではこの『なんかいい』を言語化し、それを新たに生み出すためのデザイン手法について検討しました。

結論を要約すると、『作り込みすぎない』ことです。余白や選択肢を設け、ユーザーの行動を規定しない。沿道の住民や歩行者が、『予期せぬ行動（緑を置いたり、猫の溜まり場になったり…）』をとることで、プランナーも想定しなかった自由な過ごし方が生まれる環境が作られるのではないのでしょうか。そうするとプランナーは計画しないことを計画しなければいけないのですが、これも面白いテーマです。研究会の成果はQRコードから見ただけですと幸いです。



近況 & イベントのお知らせ

事務所だより

名古屋

「いざ行かん 市場めし」

名古屋事務所 植松陽子

名古屋事務所から徒歩5分の場所にある柳橋中央市場は、都心の一等地に突如現れる昭和を感じさせる異空間。ここは、明治時代後期に自然発生的に始まった万物問屋がまとまり開設された民間の中央市場で、駅前の広さ約3,000坪に100店舗以上が並んでいます。

名古屋の台所と呼ばれるだけあり、市場内外には、



路地奥ならぬ駐車場奥で営業する店

市場関係者が通うようなディープなお店から、ちょっと小洒落たお店まで、様々な「市場めし」も堪能できます。海鮮系、肉、イタリアン、ラーメン等々、多種多様な美味が揃う空間。昼はランチ、夜は一杯ひっかけに。自分の足で見つける楽しさをぜひ。



市場内



駐車場スロープを上った先に店舗があります

適塾路地奥サロン報告

適塾路地奥サロン実行委員会

51回

2023年
1月26日

「グリーンインフラによるまちづくり～「みどり」の力を活かした古くて新しいまちづくりの手法～」
講師 明石工業高等専門学校

石松一仁氏

第51回は、明石高専の石松先生をお招きして、みどり（自然環境）が持つ多様なはたらきを積極的に活用して、持続可能で魅力あるまちづくりを進める「グリーンインフラ」についてご講演いただきました。

当日は、造園、自然環境、都市計画、建築など多分野の専門の技術者・研究者や学生の方々が参加され、質疑応答では異なる専門分野からみた「グリーンインフラ」やまちづくりの視点について意見交換できました。そのなかで、グリーンインフラという言葉は浸透しつつあるが、具体的にどう社会に実装していくかは、どの分野でも模索している最中である、という印象を受けました。様々な分野の専門家が知恵と技術を寄せ合うことができれば、より実装に近付くのかもかもしれません。

そして、今回のセミナーをきっかけに、グリーンインフラの多分野連携を考える勉強会を開催してはどうか、という意見もあがりました。セミナー後アンケートでも参加希望の声があったため、今後そのような展開も考えていければと思います。（末次優花）

53回

2023年
4月14日

「官民連携でまちを創造していく～そのために私たちは何を变えていかなければならないのか～」
講師 株式会社コーミン

代表取締役 入江智子氏

第53回を迎えた適塾路地奥サロンでは、株式会社コーミンの入江智子氏をお招きし、大東市の官民連携事業、「morineki」についてお話しいただきました。

講演では、morineki住宅は、建築条件が厳しい市営住宅でありながら、住戸、店舗、芝生広場の各機能を連続的に設計することより、地域、住民、出店者間で自然にコミュニケーションが生まれるコモンズ空間を実現することができたと教えていただきました。

また、「エージェント方式」を実現する上で、事業を主体的に先導する、「ネオ3セク」の役割は大きく、官の力と民の力を理解し、引き出し、繋げる役割があります。そして、自らも当事者として地域に向き合い続けていく責任が伴います。社会ストックが抱える課題感と公営住宅が持つ社会的意義を認識した上で、まちの大家となる覚悟が「morineki」の実現を可能にしたと言えます。ステークホルダーを巻き込む強い思いとそこに住む人々の暮らしに対するコーミンの思いは、入江さんの強い覚悟と優しい人柄にあると感じました。（辻寛太）



塗師木伸介

建築プランニング・デザイングループ

大阪市ハウジングデザイン 賞を受賞しました

弊社にて企画設計監理をおこなった賃貸集合住宅「寺田町プレイス1」が第35回大阪市ハウジングデザイン賞を受賞しました。

大阪市ハウジングデザイン賞は大阪市内で供給された魅力ある良質な都市型集合住宅を表彰し、供給を促進するとともに、市民の方々が住宅供給に携わる人々の住宅に対する関心を高めることを目的とした、1987年から続く歴史ある賞です。審査講評では街並みや住まい手、



まちかどに設けた誰でも座れるベンチ
撮影：笹の倉舎 / 笹倉洋平

さを示す指標となる。そのなかには、本住宅は、まさに暮らしに正すこと、面から向き合い、暮らしと地域の持続可能性



外観



明るい住戸内
撮影：上 笹の倉舎 / 笹倉洋平 下 筆者

居住者の流動性の高さ、まちの更新の速さを考えるとき、賃貸集合住宅は都市部における合理的な住まいと言つてよい。そういった意味で賃貸集合住宅の質は、都市居住の豊かさ

木材利用による循環型デザイン等への配慮・工夫が評価されており、社内と社外の様々な専門家と協同して進めたことがこの結果につながったのではないかと考えています。今後この結果に甘んじず、よりよい地域づくりにむけて日々精進したいと思います。以降、審査員による講評全文です。

をテーマに、建設に至るプロセスを含め丁寧な造り込まれた住宅として高く評価された。収益性からはペンシル型の高層棟が有利な立地にあつて、6階建に抑えることで、まちとの接触面を最大化し、1階にまちと住宅とをシームレスにつなぐ装置として店舗、ウッドデッキ、ベンチが配される。外壁や軒天、サインに地元産材や風倒木を用いるなど、循環型デザインへの意識も高い。住戸は2面採光、ゆとりある水回りや収納など、暮らしやすさへの配慮に好感が持てた。まちに暮らし、普通に暮らす生活がこの住宅では実現されている。こうした意欲的な住宅が増えることで、住むまちとしての大阪の魅力が高まることを期待したい。

表紙写真：青空に映える国立新美術館 (撮影 筈谷友紀子)

「レターズアルパック」は、ホームページからご覧いただけます。



アルパック (株) 地域計画建築研究所

Architects, Regional Planners & Associates, Kyoto
<https://www.arpak.co.jp> E-mail: info@arpak.co.jp

本社・京都事務所	〒600-8007 京都市下京区四条通高倉西入立売西町82	TEL(075)221-5132	FAX(075)256-1764
大阪事務所	〒541-0042 大阪市中央区今橋3-1-7 日本生命今橋ビル10F	TEL(06)6205-3600	FAX(06)6205-3601
名古屋事務所	〒450-0001 名古屋市中村区那古野1-47-1 名古屋国際センタービル7F	TEL(052)462-1030	FAX(052)462-1061
東京事務所	〒101-0047 東京都千代田区内神田1-15-7 いちご大手町ノースビル4F	TEL(03)5244-5132	FAX(03)6273-7715
九州事務所	〒810-0802 (株)よかネット：福岡市博多区中洲中島町3-8 福岡パールビル8F	TEL(092)283-2121	FAX(092)283-2128
滋賀営業所	〒527-0012 東近江市八日市本町9-14	TEL(0748)36-2065	FAX(0748)36-2168
ホーチミン (ベトナム)	No.187/7, Dien Bien Phu Street, Da Kao Ward, District 1, Ho Chi Minh City, Vietnam		



この用紙は「びわ湖の森を元気にする」kikitoペーパーを使用しています。